

家畜衛生をめぐる情勢について

令和7年11月27日

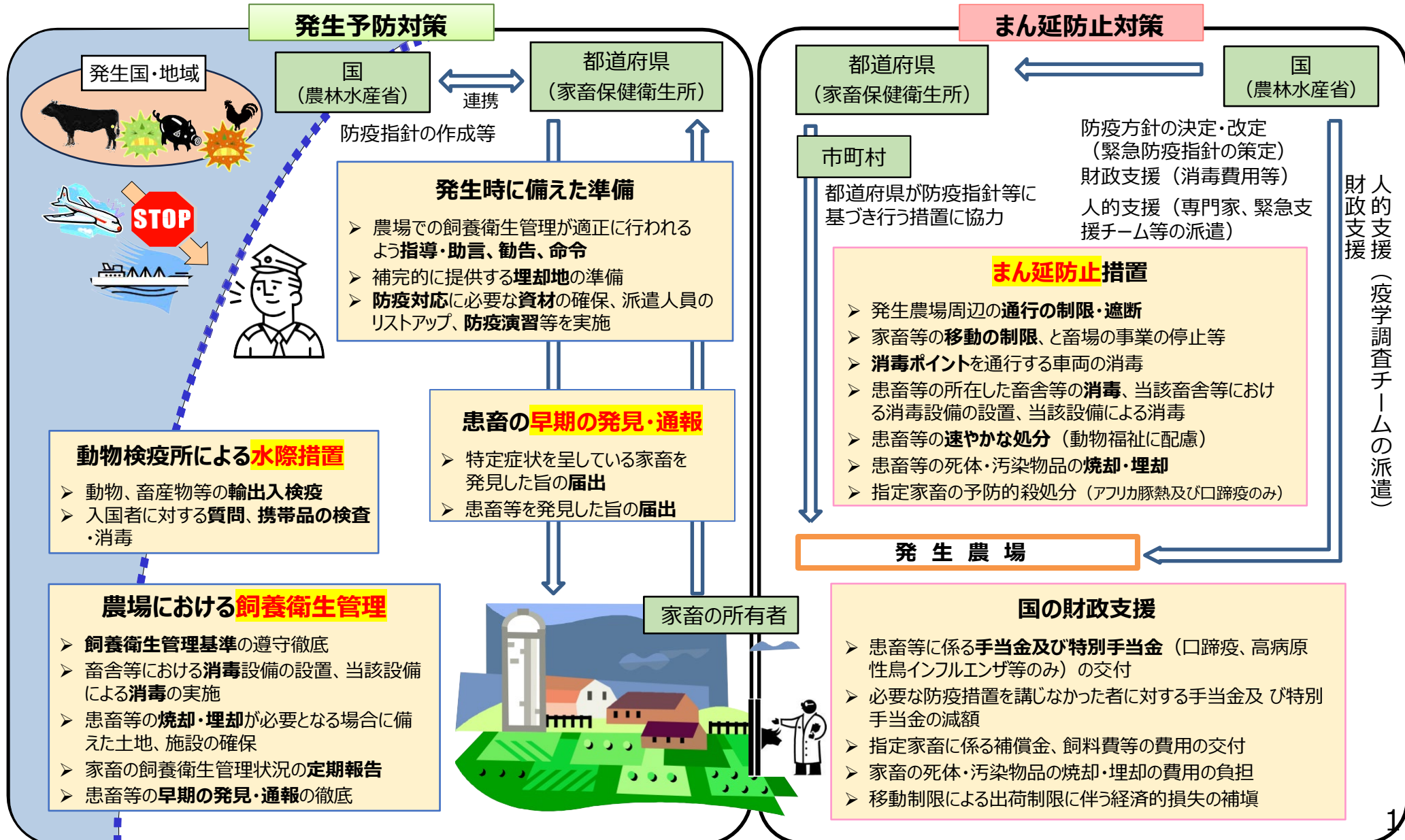
食料・農業・農村政策審議会 畜産部会

農林水産省

消費・安全局 動物衛生課

発生予防・まん延防止対策

○ 家畜伝染病予防法に基づき、家畜の伝染性疾病の発生予防・まん延防止対策を実施。



(1) 病原体

国際獣疫事務局（WOAH）が作成した診断基準により
高病原性鳥インフルエンザウイルスと判定された A 型インフルエンザウイルス



元気消失

(2) 対象家さん

鶏、あひる、うずら、きじ、エミュー、だちょう、ほろほろ鳥及び七面鳥

(3) 症状・特徴

高い致死性と**強い伝播性**をもつ。感染した家さんは、死亡に加え、元気消失、食餌や飲水量の減少、産卵率の低下、顔の腫れ、トサカや脚の変色(紫色)、咳、鼻水、下痢などを示す。

※ **人獣共通感染症**：海外では、家さん等との密接接触に起因する人への感染事例（死亡事例あり）も報告。
「我が国の現状においては、鶏肉や鶏卵を食べることにより、ヒトに感染する可能性はないと考える」（内閣府食品安全委員会）

(4) 発生状況

渡り鳥により国内に持ち込まれることが多く、**冬期に発生**しやすい。
我が国において、直近では、**令和 2 年シーズン以降、毎年発生**（6 シーズン連続）。

＜実際の事例（R4シーズン：**7 日間の通報遅れ**）＞

(5) 早期通報・殺処分の意義

早期発見できなければ瞬く間に農場内で感染拡大し、
多くの家さんが本病に感染し死亡。

⇒ **早期通報及び迅速な殺処分等**による
まん延防止措置が**必要不可欠**

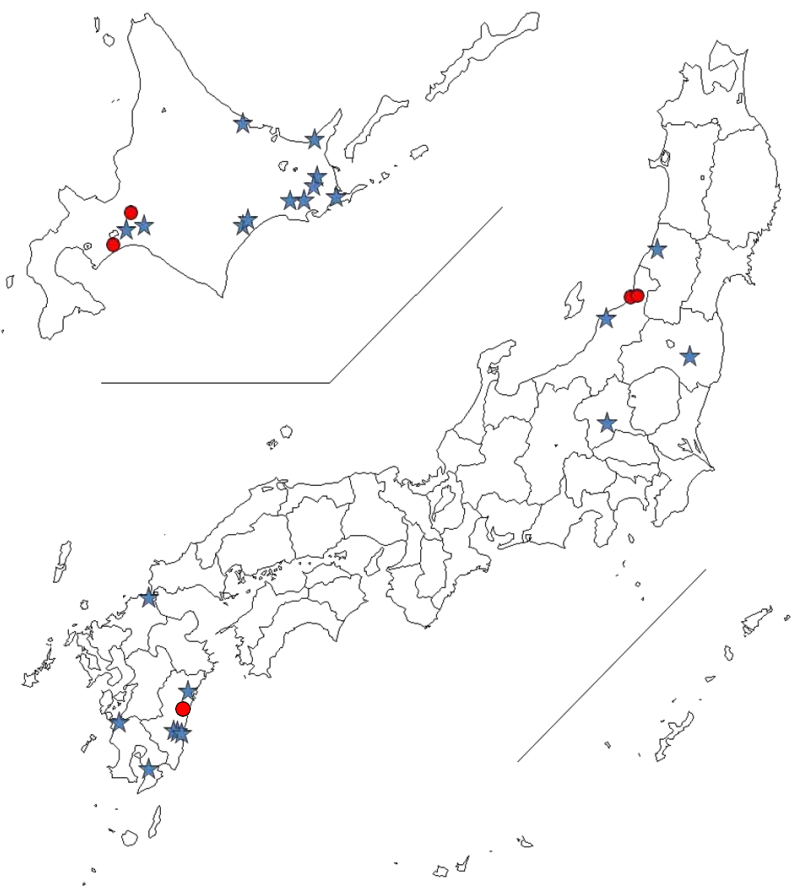
通常の死亡羽数	7 羽程度（鶏舎当たり）
異常 1 日目 （本来通報すべき日）	27羽死亡（発生鶏舎。以下同じ）
3 日目	617羽死亡
6 日目	1,389羽死亡
7 日目	3,974羽死亡
8 日目（通報当日）	さらに死亡増加（ 鶏舎の大多数が死亡 ）

鳥インフルエンザの発生状況（11月25日時点）

- 令和6年シーズンは、14道県51事例で発生し、令和7年1月に発生が急増。
- 令和7年シーズンは、これまで北海道において2例、新潟県において2例、宮崎県において1例、合計5例の家きんの陽性事例を確認。

令和7年シーズンの発生状況

● 家きん
★ 野鳥・環境試料



過去シーズンとの比較

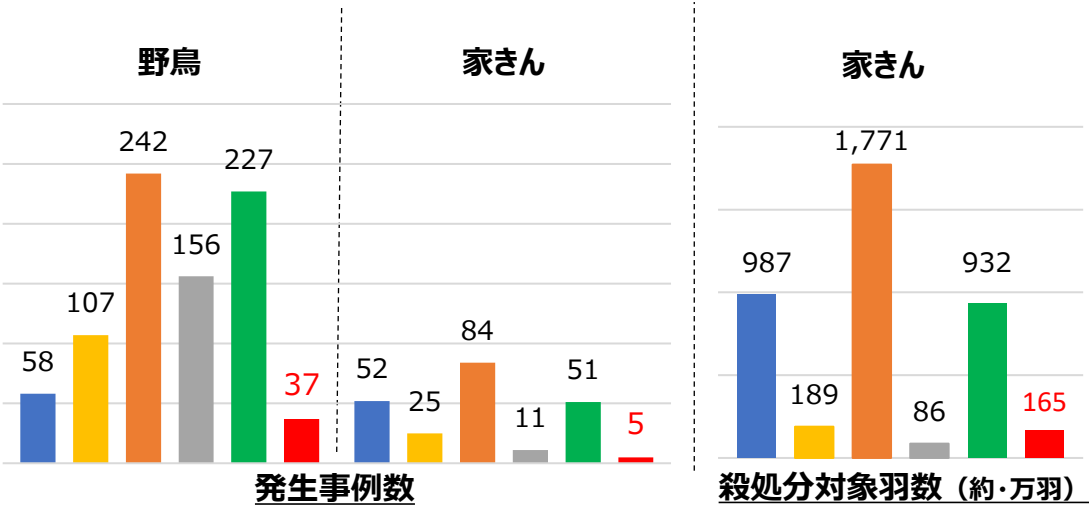
（1）初発、最終確認日

		R2シーズン	R3シーズン	R4シーズン	R5シーズン	R6シーズン	R7シーズン
野鳥	初発	10月24日	11月 8日	9月25日	10月 4日	9月30日	10月15日
	最終確認	3月 3日	5月14日	4月20日	4月30日	6月17日	
家きん	初発	11月 5日	11月10日	10月28日	11月25日	10月17日	10月22日
	最終確認	3月13日	5月14日	4月 7日	4月29日	2月 1日	

（注）野鳥の日付は回収日

（2）発生事例数（野鳥、家きん）、殺処分対象羽数

■ : R2シーズン ■ : R3シーズン ■ : R4シーズン ■ : R5シーズン ■ : R6シーズン ■ : R7シーズン



（注）野鳥における発生事例数は環境省HP参照

- 11月9日に新潟県において、今シーズン4例目となる高病原性鳥インフルエンザと考えられる事例が確認され、北から南まで、**全国どこで発生してもおかしくない状況であるところ**、鈴木農林水産大臣より、全国各地の生産者、関係者、そして消費者に向けて、以下のとおりお願いのメッセージを発出。

発生予防・まん延防止対策の徹底

① **最も重要なのは「早期通報」**

既に全国どこで発生してもおかしくないという危機感の下、**積極的な通報**を徹底。

② **「再点検」**

今シーズンの発生は、「**大規模農場**」、「**水場が近く野鳥が飛来**」又は「**過去発生地域**」といった特徴があることも踏まえ、**飼養衛生管理の点検**を徹底。

③ **「迅速な防疫措置」**

地域での発生を1か所で止めるため、**迅速な封じ込め**を徹底。



鶏卵について

- **鶏卵の流通事業者においては**、発生地域等に対して鶏卵を融通するなど、**安定供給に向けて協力を**。
- **消費者においても**、**冷静な購買活動をお願いしたい**。

農林水産省としても、都道府県と連携を密にし、
発生予防・まん延防止に向けて、全力で臨みます。

■ 原因（病原体）

- 豚熱ウイルス（classical swine fever virus）
- 罹患した豚や野生イノシシ（死体含む）との接触等により感染。

■ 宿主

- 豚、イノシシ ※人には感染しない

■ 分布

- 欧州、アジア、アフリカ、中南米の一部の国々で発生。
- 我が国では平成30年9月に26年ぶりに発生。

飼養豚では24都県、野生イノシシでは41都府県で発生（令和7年8月末時点）。

■ 症状

- 急性、亜急性、慢性型など多様な病態を示す。白血球の減少が見られる。

※有効なワクチンが存在



【皮膚紫斑（しはん）】

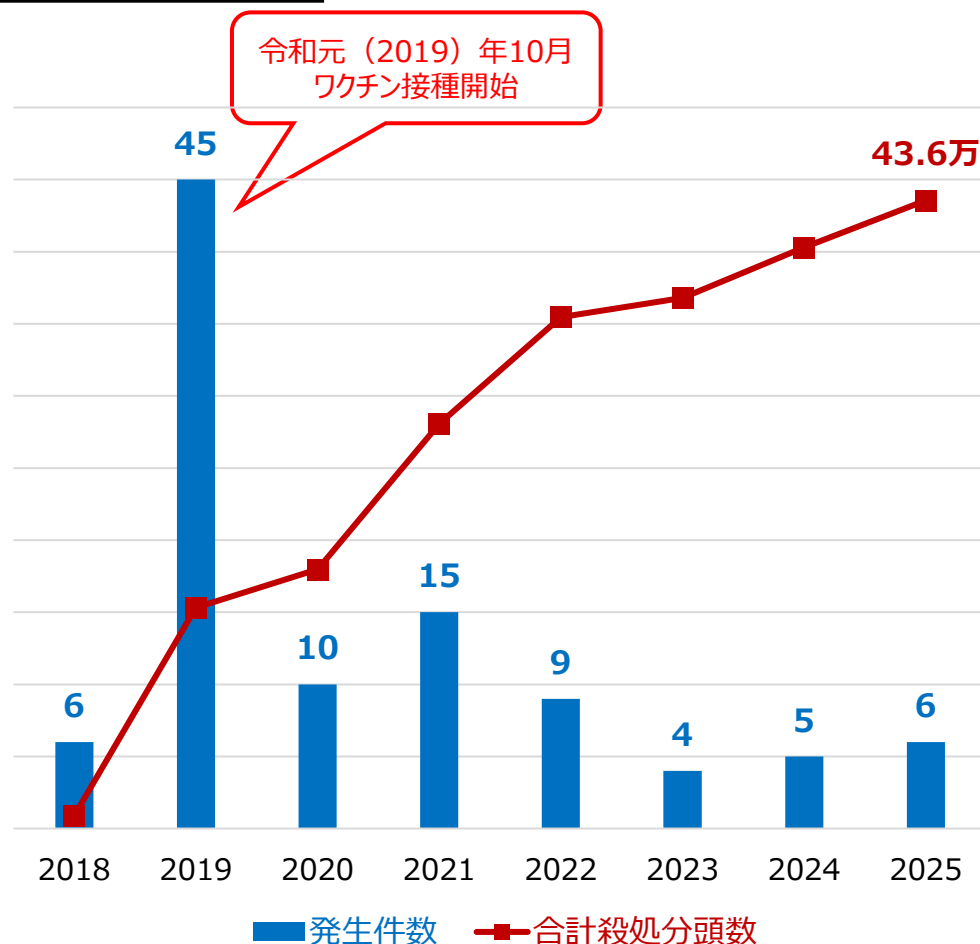
（出典：動物衛生研究部門）

豚熱の発生状況

豚熱

- 平成30（2018）年9月に岐阜県で発生。以降、**24都県**で計**100事例**発生し、**約43.6万頭**を殺処分。
- **令和元（2019）年10月にワクチン接種開始**。以降、発生は散発的となるも、野生イノシシにおける感染拡大に伴い、接種区域は北海道を除く46都府県にも拡大。
- **令和7（2025）年**は、**群馬県**で5例（95・96・98～100例目）、**千葉県**で1例（97例目）発生（10月10日時点）。

発生状況の推移



令和7年の発生状況

【群馬県】

- 1/23 国内95例目（県10例目）：約4,800頭殺処分
- 2/21 国内96例目（県11例目）：約8,700頭殺処分
- 4/5 国内98例目（県12例目）：約7,300頭殺処分
- 5/9 国内99例目（県13例目）：約460頭殺処分
- 10/2 国内100例目（県14例目）：約5,900頭殺処分

- ✓ 養豚の集中地域における発生
- ✓ 周辺地域において、発生の1～3か月前に豚熱陽性の野生イノシシが捕獲されている

【千葉県】

- 3/31 国内97例目（県初発）：約5,480頭殺処分

- ✓ 県内の野生イノシシで未発生の中で、飼養豚で発生
- ✓ 千葉・茨城両県の関連農場の約370頭も殺処分
- ✓ 防疫措置に際しては、移動式レンダリング装置を活用



◆移動式レンダリング装置の活用状況

飼養豚・野生イノシシ発生県、予防的ワクチン接種推奨地域

豚熱

○ 予防的ワクチン接種の対象地域は、防疫指針に基づき、以下を考慮し、牛豚等疾病小委員会で議論し設定。

- ① 野生イノシシにおける豚熱感染状況
- ② 農場周辺の環境要因（野生いのししの生息状況、周辺農場数、豚等の飼育密度、山、河川の有無等の地理的状況）
- ③ 疫学的リスク低減のため、まだら打ちを避ける（面的に接種し順に拡大）

飼養豚陽性発生県：赤色（ただし、斜線は、令和4年度以降発生なし。）

【24都県】（飼養頭数 4,037,930頭（全国の45.9%））

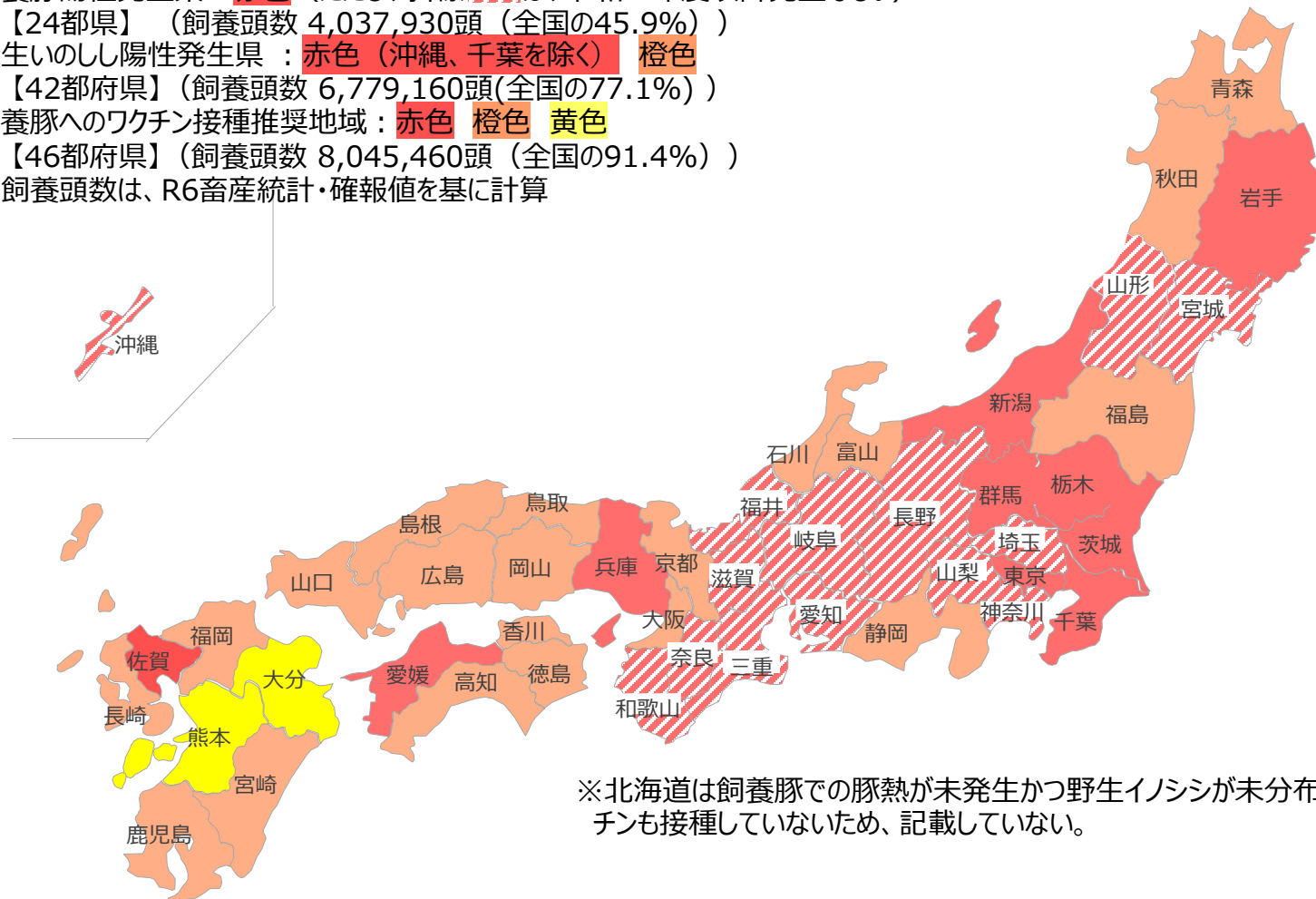
野生いのしし陽性発生県：赤色（沖縄、千葉を除く） 橙色

【42都府県】（飼養頭数 6,779,160頭（全国の77.1%））

飼養豚へのワクチン接種推奨地域：赤色 橙色 黄色

【46都府県】（飼養頭数 8,045,460頭（全国の91.4%））

※飼養頭数は、R6畜産統計・確報値を基に計算



※北海道は飼養豚での豚熱が未発生かつ野生イノシシが未分布であることから、予防的ワクチンも接種していないため、記載していない。

■ 原因（病原体）

- アフリカ豚熱ウイルス（African swine fever virus）
- 罹患した豚や野生イノシシ（死体含む）との接触等により感染。

■ 宿主

- 豚、いのしし ※人には感染しない。

■ 分布

- アフリカ、欧州の一部（ロシア及びその周辺国、東欧）のほか、平成30年8月にアジアで初めて中国で発生して以降、日本など一部を除く**アジア全域に感染拡大**。
※日本では未発生。

■ 症状

- 突然死や急性～慢性の症状、無症状等の幅広い病態を示す。
豚熱に酷似するが、病原性はより強い傾向。※有効なワクチンや治療法はない。
- 発生すれば養豚業に甚大な影響。

（※中国では、本病発生により、豚の飼養頭数が約4割減少し、豚肉価格が大幅に高騰。）



【全身の出血性病変、チアノーゼ】

（出典：Veterinary school of Barcelona, Spain
Centro de Vigilancia Sanitaria, Veterinaria, Spain）

（参考）豚熱、アフリカ豚熱の病原性に関する比較

	伝播性	致死率
豚熱	++	+
アフリカ豚熱	+	++

伝播性：感染しやすい（ウイルスに接触した豚のうち感染する個体の割合）
致死率：感染し、発症した豚のうち、死亡した個体の割合

出典：FLI（ドイツ連邦動物衛生研究所）作成資料

海外の発生状況

- 2018年8月に中国においてアジア初の発生。その後、韓国、ベトナムを始め、**アジア全域に感染が拡大**。
- 特に**韓国**では、2019年9月の発生確認以来、飼養豚・野生イノシシともに徐々に感染が拡大し、**2023年12月には、釜山広域市の野生イノシシで感染を確認**（直近では飼養豚で2025年9月に感染確認）。
- 東アジアで**アフリカ豚熱が発生していないのは、日本のみ**。

世界の発生状況

■ = 2005年以降、
WOAH等に発生・感染確認通報のあった国/地域



- **中国では、2018年の発生により、豚の飼養頭数が約4割減少し、豚肉価格が大幅に高騰。**

中国の豚飼養頭数の推移

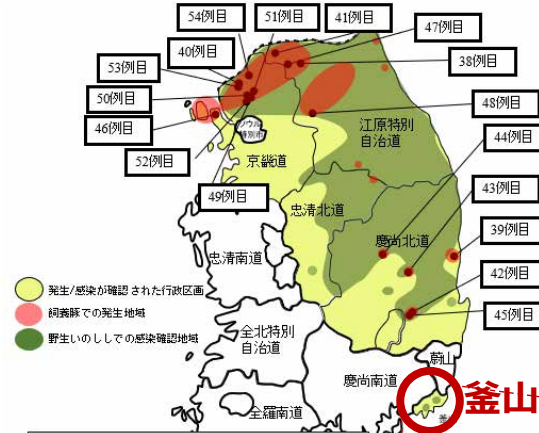


中国の豚肉価格の推移



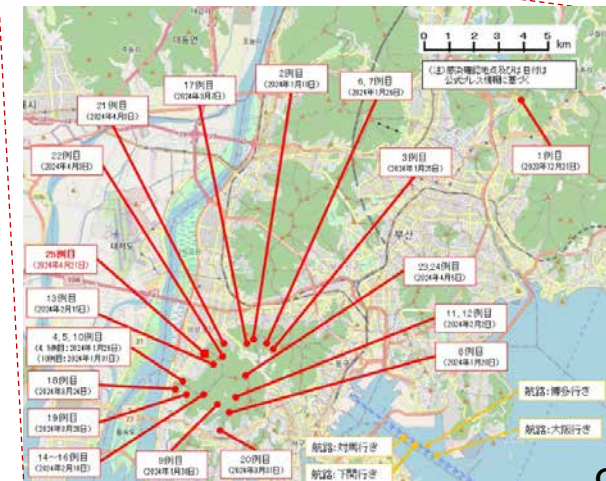
韓国における感染拡大

※令和7年9月16日時点



初発生日：2019年9月16日
発生数（豚）：54件
感染数（野生いのしし）：4,257件
豚、いのしし飼養頭数：約1,122万頭

- 2019年9月以降、**54農場で発生**。
- 2023年12月以降、**釜山広域市の野生イノシシで感染拡大**。



- 韓国・釜山の感染拡大を受け、国内への侵入防止対策を強化。具体的には、①出国前旅行者や訪日外国人旅行者に対する重点的な情報発信・注意喚起、②韓国からの全ての船舶及び航空機に対する家畜防疫官による口頭質問等の検査実施、③空海港における車両、自転車、ゴルフシューズ等の消毒徹底など、水際対策を強化中。
- 加えて、万が一国内に侵入した際に備え、外国人旅行者の立ち寄り場所などリスクの高い場所を特定した効果的な野生イノシシ侵入防止対策や防疫演習の実施等の準備を実施。

水際対策

✓ 情報発信、注意喚起の強化



空港等での注意喚起



港湾における消毒啓発 ゴルフ場における消毒啓発



✓ 家畜防疫官による検査、車両・自転車等の消毒



家畜防疫官による検査



港湾における自転車の消毒

国内侵入に備えた準備

✓ 防疫演習、関係者に向けた研修会の実施

- 令和6年度では、
 - ・机上演習：32都県
 - ・実地演習：19県
 - ・研修会：30府県

実施済み

- 令和7年度には、ASF全国担当者連絡会議を開催

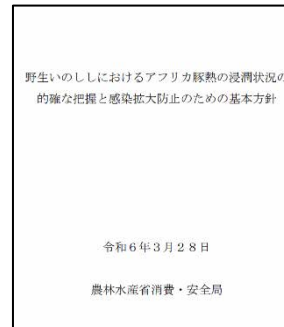


防疫演習



ASF全国担当者連絡会議

✓ 野生イノシシ対策



アフリカ豚熱が野生イノシシで確認された際の初動対応について、令和6年3月に基本方針を策定

✓ 農場対策



アフリカ豚熱啓発ポスター

■ 原因（病原体）

- 口蹄疫ウイルス（Foot-and-mouth disease virus）
- **空気感染等**

■ 対象家畜

- **牛、豚、めん羊、山羊、水牛、鹿、いのしし**

■ 分布

- 中国等の**近隣アジア諸国で継続的に発生**。
- 日本では**平成22年に宮崎県で10年ぶりに発生したが、翌平成23年には清浄国に復帰**。

■ 症状

- 口や蹄に水疱形成、発熱、流涎（よだれを垂らす）等の症状を示す。
- **極めて感染力が強く、幼獣では高い致死率を示す**。
- 成長した家畜の死亡率は低い**が、発病後の発育障害等により、産業動物としての価値が失われる**。



【牛における症状（流涎）】

我が国における過去の発生事例

口蹄疫

- 平成22年4月、宮崎県において我が国で**10年ぶりに発生**（292戸で発生、**210,714頭を殺処分**）。
- 移動制限や感染家畜の処分、消毒等の防疫措置を実施したものの、**宮崎県東部において局地的に感染が急速に拡大**したことから、我が国で初めての**緊急ワクチン接種を実施**（ワクチン接種殺処分：87,094頭）。
- **この結果、口蹄疫の発生は減少**し、同年7月4日以来発生は確認されず、7月27日に全ての移動制限を解除。

宮崎県における発生

H22.4.20

宮崎県で口蹄疫の発生を確認

H22.5.19

口蹄疫ワクチン接種の実施を決定

H22.6.4

口蹄疫対策特措法の施行

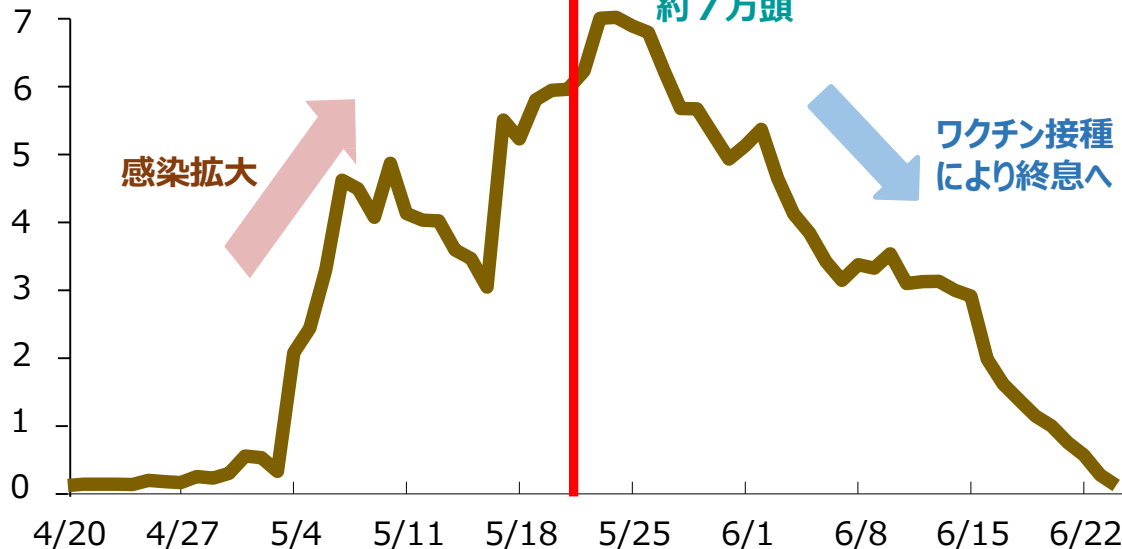
H22.7.27

全ての移動制限区域を解除

H23.2.5

WOAHによるワクチン非接種
清浄国への復帰の認定

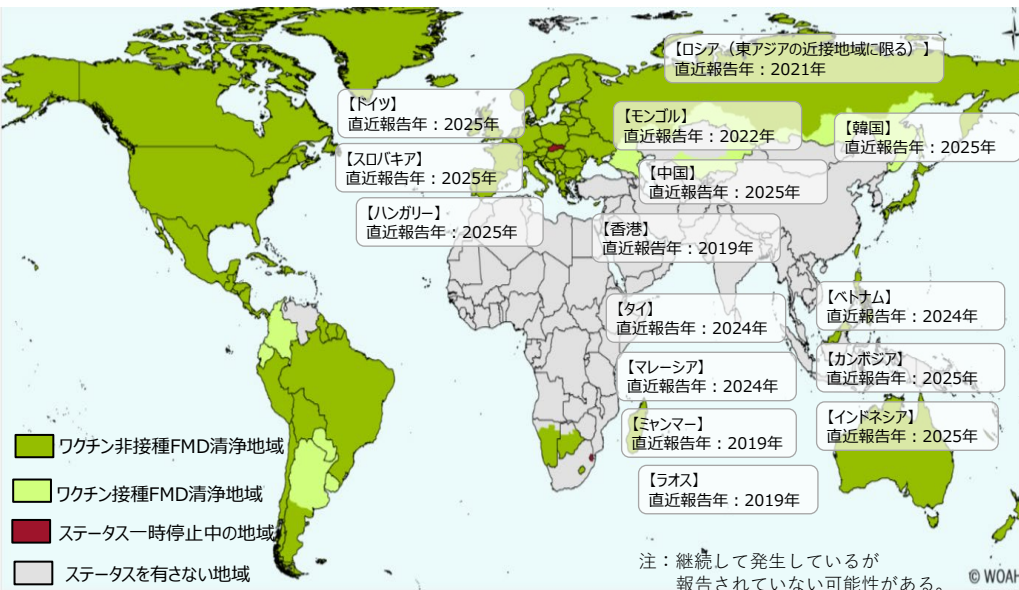
(万頭)



海外での発生状況

- **日本**では2010年に宮崎県で10年ぶりに発生したが、翌**2011年には清浄国に復帰**。
- 他方、海外では**継続的に発生**。本病はどの国でも発生し得る中、**我が国への侵入リスクは極めて高い状況**。
- 欧州**では、**2025年1月**には**ドイツ**で、同年**3月**には**ハンガリー**及び**スロバキア**で発生を確認。（同年4月付けでドイツ全土、同年9月付けでハンガリー全土がワクチン非接種清浄国へステータス回復。）
- 東アジア**では、**2025年3月**に**韓国**で1年10か月ぶりに発生を確認。

世界の発生報告状況



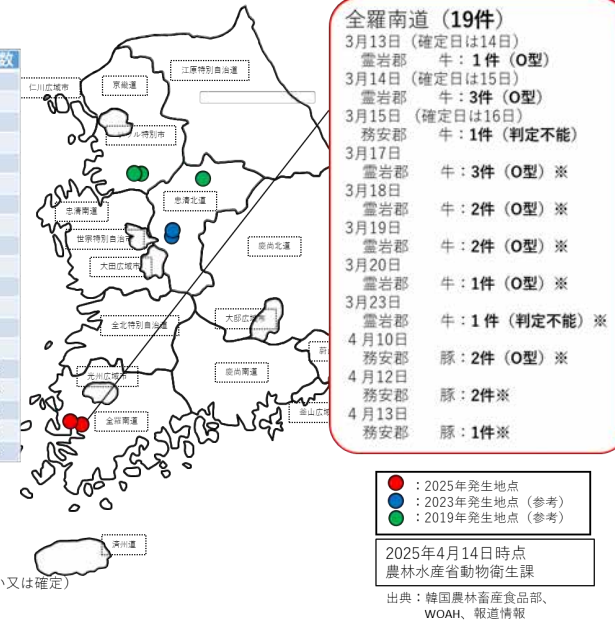
韓国の発生報告状況

※令和7年4月14日時点

発生日	場所	動物種	飼養頭数
1 '25/3/13	全南 霊岩郡	牛	184
2 '25/3/14	全南 霊岩郡	牛	15
3* '25/3/14	全南 霊岩郡	牛	471
4 '25/3/14	全南 霊岩郡	牛	31
5 '25/3/15	全南 務安郡	牛	88
6 '25/3/17	全南 霊岩郡	牛	365
7 '25/3/17	全南 霊岩郡	牛	25
8 '25/3/17	全南 霊岩郡	牛	100
9 '25/3/18	全南 霊岩郡	牛	49
10 '25/3/18	全南 霊岩郡	牛	25
11 '25/3/19	全南 霊岩郡	牛	125
12 '25/3/19	全南 霊岩郡	牛	835
13 '25/3/20	全南 霊岩郡	牛	43
14 '25/3/23	全南 霊岩郡	牛	31
15 '25/4/10	全南 務安郡	豚	5,223
16 '25/4/10	全南 務安郡	豚	1,736
17 '25/4/12	全南 務安郡	豚	1,951
18 '25/4/12	全南 務安郡	豚	1,931
19 '25/4/13	全南 務安郡	豚	3,216

*関連農場2農場（いずれも検査陽性）あり。

注：日付はWOAH報告の発生日
ただし、WOAH未報告の場合は韓国当局公表日（疑い又は確定）とし、件数の後に※マークを記載
頭数は当該農場で飼養されている感受性動物数



ランピースキン病について（特徴と発生状況）

ランピー
ススキン病

- ランピースキン病は、牛の皮膚に病変等が生じる疾病であり、生乳の生産等にも影響。致死性は低いものの、有効な治療法はない。人には感染せず、畜産物も食用上安全。
- 令和6（2024）年11月6日、福岡県の乳用牛農場で、我が国初の感染を確認。令和7（2025）年2月以降、新たな発生は確認されていない。

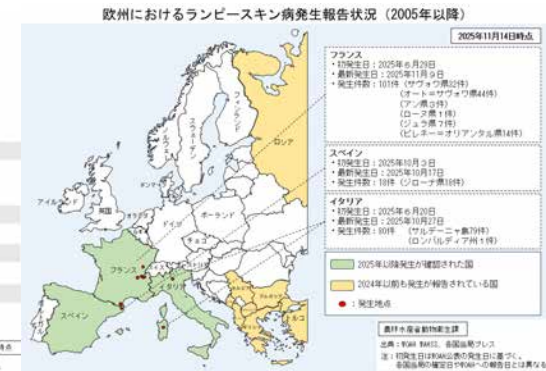
ランピースキン病とは



写真提供：モンゴル国中央獣医学研究所
(State Central Veterinary
Laboratory in Mongolia)

- 皮膚の結節や乳量の減少等の症状を呈する、牛・水牛の病気。
- 主に蚊等の吸血昆虫による機械的伝播により感染が拡大。
- 有効な治療法はなく、致死性は低いものの、吸血昆虫等により急速にまん延し、生乳の生産等に影響を及ぼすため、殺処分による早期封じ込めが必要。
- 人には感染せず、畜産物も食用上安全。

海外の発生状況



- アフリカで流行
- 2010年代、中東の一部、トルコ、南ヨーロッパにおいて発生
- 2019年以降、アジアでの発生拡大
- 2023年及び2024年、韓国で発生
- 2025年、イタリア、フランス及びスペインで発生

韓国での発生を受け、ワクチン備蓄や防疫対策要領の制定により、我が国への侵入に備えていた。

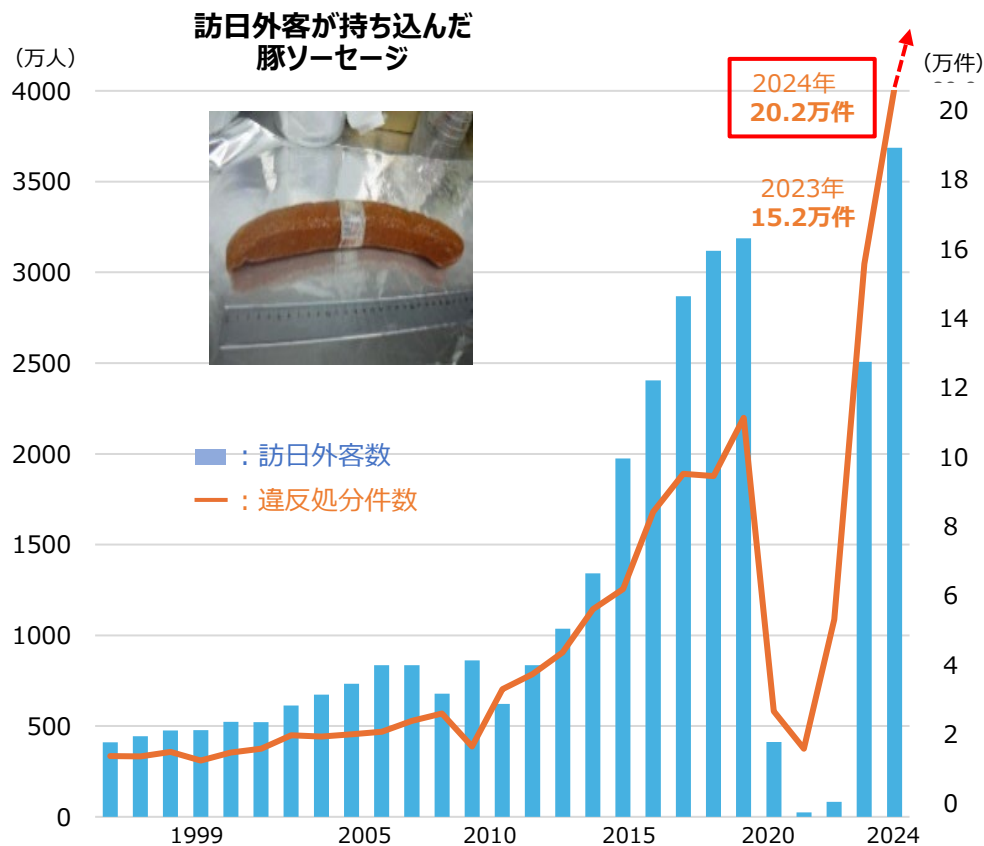
国内の発生状況

- 令和6（2024）年11月6日：福岡県内の2農場で初めて発生を確認
同年12月18日までに19事例の発生を確認
- 発生農場から牛が移動しており、熊本県でも発生
同年12月26日までに3事例の発生を確認
- 令和7（2025）年2月以降新たな発生は確認されていない

水際における更なる侵入防止対策の強化

- 訪日外客数の増加により、違反品の持込みが著しく増加。組織的かつ反復した、悪質と思われる事例も顕在化。
- 動植物検疫の強化に向け、「水際検疫の強化に向けた検討会」において、水際強化策の具体化・関係行政機関との連携強化を議論。
- 検討会の議論を踏まえ、法制度面も含め、強化策の具体化に着手。

訪日外客数と持込禁止品の摘発件数



資料：(訪日外客数) 日本政府観光局
(禁止品摘発件数) 農林水産省「動物検疫統計」※2024年は速報値

外国食材店における違法輸入豚肉製品緊急調査

- 購入した豚肉製品66品について、
①外装の確認及び②アフリカ豚熱ウイルス遺伝子の検査を実施。

- ① 外装確認の結果、違法輸入疑い品：12品（うちベトナム産9品）
② ①のうちアフリカ豚熱ウイルス遺伝子検出：2品

* 感染力のあるアフリカ豚熱ウイルスは発見されていない。

◆外国食材店◆



◆アフリカ豚熱ウイルス遺伝子検出の2品◆



出典：Google Map